

# ハーディとワイルド

## ——田舎、都会、イングリッシュネス

金子 幸男

ハーディとワイルドという対照的な二人の作家を比較するのが本論の目的であるが、前者は田舎を、後者は都会を連想させることが多いので、二人に現れる田舎と都会の表象を取りあげてみたい。ただし、イングリッシュネスという観点から見てゆきたい<sup>1</sup>。ハーディが田園のイングリッシュネスと関係づけられることは、ピーター・ウイドウソン以来のことであるが<sup>2</sup>、ワイルドとイングリッシュネスはどうか。リチャード・ハスラムによれば、ワイルドのアイリッシュネスの問題は、1990年代以来すでに批評家による活発な議論が始まっていたとのことであり、特にアンチ・イングリッシュネスの色彩が濃いようだ<sup>3</sup>。アイリッシュネスとセットでイングリッシュネスのテーマが現れてくるというのは他者がアイデンティティ形成に関わるということ为例証していて興味深いが、ここでは、アイリッシュネスの問題には深入りせず、ハーディとワイルドという二人の作家について田舎と都会をイングリッシュネスの観点から眺めてみたい<sup>4</sup>。同時代の二人を比較する場合の見取り図を提示できればよいと思う。

一般的にナショナル・アイデンティティとは何か？ A. D. スミスは、ナショナル・アイデンティティの要素として、次の五つを取りあげている。① 領土または故国 (homeland) ② 神話と歴史 ③ 大衆の公的文化 ④ 法的権利と義務 ⑤ 経済と移動の自由。スミスのあげた要素のうち、特に1番目の「領土または故国」に注目すると、パトリオティックな愛情を喚起する故国という意味だけではなく、郷土愛というときの生まれ故郷、私的な感情の醸成される家庭の意味でとつてもよい。ただし、故郷とか家庭にまで

絞る場合には、それが何らかの意味でイングリッシュネスを象徴する場所になっていることも必要になるであろう。

ではなぜホームを取りあげるのか。それは世紀末イギリスにおいて、国民意識が高まり、アイデンティティを故国全体というよりも、田舎、それも南部イングランドの田舎に置く状況が生まれていたからである。精神的拠り所としてのホームが重要になっていたのだ。それを反映するかのようには、ハーディが描く田舎は南部イングランドである<sup>5</sup>。ワイルドでは田舎のカントリーハウスと都会のタウンハウスをバランスよく舞台として用いており、田舎に比重を置いているわけではないが、世紀末の社会不安の中、田舎と都会でホームの問題がどう浮かびあがるのかを考えてみる必要はあろう。

国民意識、つまりイングリッシュネスが高まった理由として、批評家クリシャン・クマーがあげているのは、第一に、ブリティッシュ・アイデンティティが弱くなったことである。その要因は二つ、ポーア戦争における苦戦を契機とした大英帝国に対する自信喪失と、同じプロテスタント国のドイツ、アメリカがライバルとして台頭し、反カトリックを旗印として団結する力が弱くなったこと。田舎ナショナリズムが高まった第二の理由は、英国や欧州で、デカダンス、退化の考えが広まり、より健康的なものが求められるようになったこと。第三の理由は都市問題、ロンドンの貧民、病気、公衆衛生、汚染、退化などの都市問題に対する解決が求められたこと。結果的に不安定な大英帝国や首都ロンドン以外の場所ということで、イングランド南部、サウス・カントリー(ケント、サセックス、ウィルトシャー、サマセット、ハンプシャー、ドーセット)に目が向けられたのである。ここがイングリッシュネスの本質を表す場所、ホームとなったのだ(第7章)。

以上のことを念頭におきながら、本論文では、田舎と都会についてホームを形成できるのかどうかを論じる観点として、I. ダンディズム II. チャリティ III. カントリーハウス IV. 家系 V. 肖像画を取りあげる<sup>6</sup>。

## I. ダンディズム

まず、ダンディとイングリッシュネスの関係を探っていきいたい。まずはダンディとは何か。山田勝は七つの要素をあげる<sup>7</sup>。

- ①活動領域はロンドンの一部 (St. James St., Pall Mall, Bond St., etc.)
- ②貴族趣味 (閑暇と怠惰の価値、浪費と借金のすすめ、外見の美しさへのこだわり、労働・事務の嫌悪)
- ③俗衆を見下す不遜な姿勢 (反民主主義、反平等主義)
- ④自己崇拜、自分の人生の芸術化のための演技
- ④貴族的な優雅なファッション
- ⑤反自然、特に田舎への嫌悪
- ⑥強い美意識 —— 純粹芸術 (音楽、文学、絵画、建築) の活動と生活環境の美化
- ⑦不健康の賛美 = 生産・労働重視のブルジョワへの批判

ダンディは芸術作品としての演技を理解できる観衆としてロンドンの上流人士の集まる場所、つまりセント・ジェイムズ通り、ボンド通りなど、ロンドンの一部地域に出没するのであるから、基本的には田舎にはダンディはいないはずである。また、反自然の立場から特に田舎を嫌悪しているので、ダンディは田舎には出没しないはずだ。

ダンディズムは、19世紀初頭、ポー・ブランメルを筆頭にイギリスに出現してから衰えると、パリへ移り、世紀末に再びイギリスへと戻っているが、その性格は世紀のはじめよりはラディカルになったようだ。世紀末ダンディがどのようなものであるかは、ワイルドのドリアンを理解するのにも必要なので、ここでその特徴を見ておきたい。

ブルジョワたちの鼓吹する精神主義と偽善性に真っ向から立ち向かう連中が、十九世紀末のロンドンに登場した。いわゆる世紀末芸術家たちの群れである。彼らは耽美主義、悪魔主義、背徳、偽悪というブルジョワ精神と対立する武器を手にしたのである。・・・ブルジョワたちの精神主義を具現化したような地味な服装を軽蔑するように、ブランメルのような貴族的優雅な服装を採用し、世間を挑発した。(山田『ダンディズム』3; 下線は筆者)

ブルジョワのリスpekタビリティに対する嫌悪や、彼らの慈善事業等の社会活動に対する嫌悪から、いかに世紀末芸術家が善に対して悪を称揚、退廃的な行動に走ったかがわかる。ブルジョワの精神主義や偽善性といっても裏を返せば、家庭のイデオロギーを支えていたものだから、これは、ホームという「イギリス的なもの」、それに反対する立場を都会のダンディは打ち出していたことがわかる。

さて次に、ハーディの小説に出てくるダンディを検討してみよう。ハーディの小説はほとんどが田舎の村や町が舞台で、農村地帯が舞台である。だからダンディの出る幕はないはずだ。ところが、ダンディの基準を少しゆるめると、つまりは美意識や人生の芸術化という基準棒をはずすと、ダンディもどきの人物、「田舎のダンディ」と言ってもいい人物が登場する。ハーディの田舎ダンディには美的感受性は期待できないのである。

『遙か狂乱の群れを離れて』は、女農場主バシシバをめぐる、トロイ軍曹、羊飼いがイブリエル・オーク、農場主ボールドウッドの三角関係を描いたものである。トロイが初めて女農場主バシシバ・エバディーンと、夜、プランテーションの中で出会う次の場面では、トロイのスパーにバシシバのドレスが絡みついて取れない。

The man to whom she was hooked was brilliant in brass and scarlet. He was a soldier. His sudden appearance was to darkness what the sound of a trumpet is to silence. Gloom, the *genius loci* at all times hitherto, was now totally overthrown, less by the lantern-light than by what the lantern lighted. (152; ch. 24; 下線は筆者)

赤い軍服のきらびやかさで女性をひきつけ、剣の舞で女性をまいらせてしまうのが、トロイのやり口であり、バシシバもその餌食となった。それ以前には、別の農場でメイドをしていたファニー・プライスという若い女性を妊娠させ、捨てられたファニーは救貧院で最期を迎えている。トロイはバシシバと結婚して農場主となったが、仕事はしようともしないし、理解もできないで、ひまを持って余している。このように、外見の美しさにこだわり、怠惰に価値をおき労働を嫌悪する貴族趣味は、トロイが田舎ダンディ

であるということを示している。いったん行方不明、死亡と推定されたトロイは、突然パーティ会場に姿を現し、バシシバに求愛していたボールドウッドという近隣の農場主により射殺される。ここでは田舎ダンディは存在できないことが分かる。また『テス』に出てくるアレックもダンディであるが、テスを情婦として囲うことしかできず、最後には刺殺されるので、ホームを形成できない<sup>8</sup>。

このように田舎ダンディは女性といい仲になり、ときには結婚さえする場合もあるが、リスペクタブルなホームを形成できないのである。田舎ダンディであっても、都会のダンディ同様アンチ・イングリッシュなのである。だからハーディのようなホームに基盤をおいた田園のイングリッシュネスを称揚した作品の中では生きながらえることができないのだ。

それでは、ワイルドの作品に登場するダンディはどうだろうか。ワイルドの社交喜劇は、結婚の成立やホームの維持を主要なプロットとする喜劇であるが、ここに出てくるダンディは、ドリアンのようにたちの悪いものではなく、最終的には、裏をかかれて無力化されている。『理想の夫』では、ダンディのゴーリング卿とメイベル・チルターン嬢が結婚し、『ウィンダミア卿夫人の扇』では、ダンディのダーリントン卿は、ウィンダミア卿夫人を誘惑するもアーリン夫人の機知によって妨げられる。『大したことの無い女性』のイリングワース卿は、アーバスノット夫人により手袋で頬をたたかれ、結婚の申し込みを拒絶される。他方、ジェラルド・アーバスノットとヘスター・ワスリーの結婚が成立する。また、『まじめが肝心』のジャック・ワーキングとアルジャーノン・モンクリフもそれぞれ、グウェンドレンおよびセシリーと婚約する。したがって水面下ではどうあれ、表向きは、何事もなかったかのように、リスペクタブルなホームが、持続してゆくようである。しかし『ドリアン・グレイの肖像』になると、先ほど見た世紀末ダンディの説明にあったようにドリアンは背德的、偽悪的、耽美主義的な退廃した輩であり、それを武器に中産階級の狭量なピューリタニズムと偽善性に対抗する。したがって、ブルジョワを支えるドメスティック・イデオロギーの苗床であるホームは形成されず、ダンディのドリアンは自分のダブルを殺すと同時に死に、もう一人のダンディのヘンリー卿も妻に逃げられ離婚してしまうので、都会のダンディがいかにホームとは無

縁な存在であるかがよくわかる。つまり、反イギリス的であることが理解できる。

## II. チャリティ

チャリティについては、金澤周作が次のように定義している<sup>9</sup>。

18世紀半ば以降19世紀を通じて、英国では空前の規模で慈善・博愛活動がなされた。貧者はもとより、病人、障害者、孤児、未亡人、老人、娼婦、犯罪者、被災者、黒人奴隷、未開人、動物といったさまざまな対象に、医療、教育、職業訓練・斡旋、金、物資、食糧、宿所、宗教、生活指導、政治的支援などのさまざまな救済が与えられた。英国では当時、こうした活動全般を、通例、公的な救済行政と区別して、チャリティ(chaity 慈善)ないし、より包括的にフィランソロピー(philanthropy 博愛活動)という言葉で表現していた。(3; 下線は筆者)

さらに、チャリティ(=フィランソロピー)はイングリッシュネス、つまり「英国人/イギリス人」の国民意識を醸成したという<sup>10</sup>。反仏・反カトリックと並んで「他者」と「われわれ」を区別する指標として機能したのである。「不運な同胞に対する同情心の深さが、いわば「内側」から英国人の自己像を定めた」(金澤 228)のである。このように、チャリティは他者の苦しみへの同情心に満ちたものとして国民性をとらえることに寄与し、英国国民意識の一部となる。

では、ハーディとチャリティの世界はどうかかわってくるか。ハーディはチャリティの世界をあまり描かない。パターンリズムやホスピタリティを描く程度だ。それも数は多くない。理由はよくわからないが、あまりにも当たり前の世界で関心がなかったのかもしれない。例えば『遙か狂乱の群れを離れて』の収穫を祝う夕食(harvest supper)の場面をあげることができる。農場主バシシバが農場労働者たちをねぎらうのであるが、これはパターンリズムの例と言っていい。また、テスがハンターに撃たれたキジを安楽死させる場面、ジュードがワナにはまった野ウサギを安楽死させる場面は、動物へのチャリティ行為だろう。

ところがワイルドの場合にはチャリティへの言及が多数あるが、怒りを感じているようですらある。

『ウィンダミア卿夫人の扇』では、ベリック侯爵夫人の姪たちがチャリティに関わっている(1.266-71)。『理想の夫』では、かつて内閣の大秘書だったサー・ロバート・チルターンは、スエズ運河株買収に関するインサイダー情報を売って得た金で、現在の外務次官になった。チルターン卿がチャリティに多額の寄付をしているのは良心をなだめるためであるとされ(2.170-74)、卿夫人とともに社会改善運動に貢献している(1.290-309)。娘のメイベル・チルターン嬢とチャリティの関係も深い(2.521-32)。

しかし、ブルジョワの偽善に批判的なダンディのワイルドは、チャリティに対して肯定的な態度を取ってはいない。『何でもない女』では、ダンディのイリングワース卿は、イーストエンドの問題は貧しい奴隷の問題であり、奴隷は娯楽で解決すると言って、貧困の本質を見ない(1.263-265)。さらにレディ・キャロラインは娯楽さえ必要なく、毛布と石炭で十分だと言う(2.272-273)。チャリティに無理解なイリングワース卿は、貧民の住宅問題にも関心はない(2.57 & 370-71)。また、チャリティを行う動機も、アーバスノット夫人に至っては、男の誘惑にはまってリスペクタブルな社会から拒絶された夫人が、貧民に受け入れてもらうためだという(4.238-44)。

さらに『ドリアン・グレイの肖像』ではより明確な反チャリティの姿勢が表れている。ヘンリー卿は、叔母のアガサ夫人の家の退屈な昼食会に出席すると、グッドボディ卿の話題は、貧困層に食事を与えることや、理想の宿泊所の必要性のことばかり。上流の出席者ばかりが、自身の生活では順守する必要のない美徳の重要性を説く。金持ちが儉約の価値を説き、のらくら暮らす者が労働の崇高さを雄弁に語る。そのような場所から逃れられてよかったとヘンリー卿は語る(15-16; ch. 1)。さらには、ドリアンにイーストエンドで慈善事業の手伝いをさせているアガサ叔母を、ドリアンの美に言及することもできない審美眼のない人間とみなして否定的だ(16; ch. 1)。ドリアン自身に向かっては、ヘンリー卿は「慈善事業などに関わるには、あなたは魅力的すぎますよ」(19; ch. 2)と述べてチャリティは魅力のない人間が自分の価値を高めるためにする行為であると否定的な言葉をはく。チャリティに批判的な言説は、都会と田舎を問わず、中産階級のリス

ペクタビリティと結びついた家庭のイデオロギーや精神主義に反発するもの、ホーム(故国、郷里、家庭)の安定化を阻むものと言えよう。

ワイルドのチャリティ批判がもっともよく表現されているのは、「社会主義下の人間の魂」である。そこでは、利他主義とその実践であるチャリティが貧困をかえって永続させてしまい、社会主義こそ貧困をなくす最良の治療薬であるという。おまけにチャリティにより自分を殺す代わりに、個人主義にもとづけば喜びを伴う人間的な完成があるとする。それはまた新しいヘレニズムであると言う<sup>11</sup>。また、チャリティの根底にある苦痛への共感偏りであり、生の全体に対して、すなわち人生の喜び、美、エネルギー、健康と自由にも共感すべきであると言う。この考え方は、『ドリアン』の中のでてくる、新快樂主義と通じるところもある。若さと美の価値を高く評価し、ピューリタニズムの精神主義を否定する。他人の苦しみのために自己犠牲を厭わないのは病的な偽りの理想であるというこの主義には、チャリティ否定の響きが込められている(24-25; Ch. 2)。また『何でもない女』においても、イリングワース卿が、貧民の苦しみに同情することは現代の悪徳であり、そんなことよりは人生／生活の喜び、美、色彩に共感するほうがよいと言った考え方と共通する(1.2.255-262)。ワイルドの社会主義も新快樂主義も、ヴィクトリア朝的なホームとは相いれないものであり、アンチ・イングリッシュネスの実践であると言えるであろう。

### III. カントリーハウス

次に、イングランドの権力の館(パワーハウス)であり、ネーション・ステートの象徴的存在ともいえる、田舎のカントリーハウスを取りあげたい。まずはハーディからみてゆこう。

一部マイナーな作品ではカントリーハウスは前景化されて出てくるのであるが、主要な作品になると背景に退いて、端役でしかない。カントリーハウスは牛の住まいになっている場合もある<sup>12</sup>。前景化されている作品でももともとそこに住んでいた上流階級が住めなくなって出ていくとかいう筋書きのものが多<sup>13</sup>。これは貴族、ジェントリー階級の衰退の反映ではないかと考えられる。衰退はまた偽カントリーハウスの出現にも見られよう。『テス』のアレックとその母親が住むスロープと呼ばれるカントリー



ハウスは偽物と言っていい。それは、“not a manorial home in the ordinary sense, with fields, and pastures, and grumbling farmer,” “a country-house built for enjoyment pure and simple, with not an acre of troublesome land” (55: ch. 5; 下線は筆者)であり、居住を主たる目的としたものだからだ。おそらくは周辺住民、領民との接触もほとんどなく、パターンリズムの実践もないカントリーハウスであろう。これは北部の商売で財をなしたアレックの父親がジェントルマンになりたくてお金で建てたもので、このような成金の疑似カントリーハウスが増えてくる傾向があるということは、貴族の側の衰退がはじまっていることの証左とみていい。

では、ワイルドのカントリーハウスはどうなっているのでしょうか。『何でもない女』、『まじめが肝心』の舞台は大部分がカントリーハウスである。劇の中では、さまざまな問題があっても結末はうまく行くようにと処理されている、そこにはカントリーハウスの存在を認めざるを得ないイングリシュネスの磁場が働いていると言えよう。ただ、そのカントリーハウスも、厳しい社会的経済的現実と直面して揺らいでいるようだ。

まずは『何でもない女』では、カントリーハウスは否定されていない。第一幕で、カントリーハウスゆえにイングランドはアメリカに優越すると言わんばかりに、カントリーハウスを持たないアメリカ出身の女性ヘスターに対して、レディ・キャロラインとレディ・ハンスタントンが自慢するのである。イングランドの田舎生活 (English country life) のよき思い出を持ち帰るヘスターということになる (1.57-59)。ヘスターはのちに都会生活よりも田舎生活のほうがいいと答えている<sup>14</sup>。また、カントリーハウスはタウンハウスに対してリスペクタビリティの点で優越している。なぜかと言えば、ロンドンの家の部屋には、“orchids, foreigners, and French novels” (4.31) といった派手で不謹慎なものばかりだが、田舎のカントリーハウスには、“the room of a sweet saint. Fresh natural flowers, books that don't shock one, pictures that one can look at without blushing” (4.32-34) があり、ケルヴィル国会議員によれば、“the beauty of our English home-life” (1.333) を感じ取ることができ、レディ・スタットフィールドも “nothing like the beauty of home-life” (1.335-6) と相槌を打つ。ケルヴィルはさらに “the mainstay of our moral system in England” (1.337) であるとまで言う。彼が念頭におい

ているカントリーハウスは、マーク・ジルアールが言うところのヴィクトリア朝の道徳の館 (Moral House) のことであり、家庭のイデオロギーによって支えられたこのホームが道徳的支えでありながら美しいと言われているところに、このホームの磁場の強さ、イギリス的なものの力が見て取れる。ところがダンディのイリングワース卿は、そのホームには価値を置かないと言われているのだ。

このカントリーハウスはしかし、世紀末の時代には経営していくのが困難な時期に入っていた。『まじめが肝心』には、昨今の貴族の厳しい生活状況を指摘したセリフがいくつか出てくる。グウェンドレンとの結婚を望むジャック・ワーキングの財産をめぐって、ブラックネル卿夫人がジャックとやりとりする場面 (1.484-502) は貴族のおかれた厳しい社会的経済的状况を示している。ジャックが土地ではなく株券で財産を持つというと、ブラックネル卿夫人は、土地 (= 地位) には税金、相続税がかかり、地代収入は少ないので財産として持つなら、株のほうが賢いと彼をほめる。だからジャックの田舎のお屋敷が些少の土地 (1500 エーカーほど) とわかっていてもあまり問題にはならない。普通なら土地の広さは大きな問題になるところだ。だがカントリーハウスの地所の所有はプラス価値ではないのだ。

カントリーハウスをめぐる 18 世紀～20 世紀初頭の文化的・社会的状況をジルアードに依拠して簡単に概観すると、長い 18 世紀を経て、ロマン派の時代までは、コスモポリタン文化が花咲いた、上流趣味の時代で初期のダンディが活躍した時代であった。1815 年から 1870 年までは、ナショナル・カルチャーおよび道徳の館としてのカントリーハウスが成立した時代である。1870 年から 1914 年までは、農業不況による貴族・ジェントリー受難の時代で、ハーディとワイルドの時代に当たる。地代収入は下がり、上流階級は困窮する。土地収入のみに頼っていた貴族は経済的打撃を受けた。おまけに相続税が課されるようになる<sup>15</sup>。

時代の農業不況による上流階級の社会的、経済的力の衰えとともに、カントリーハウスは、ハーディにとっては、貴族、ジェントリー階級の衰退の反映であることがその扱い方から、つまりは端役に甘んじているか、あるいは所有者や住人が上流の者以外に変わってしまうということからわかった。ワイルドも道徳の家としてのカントリーハウスがホーム形成に果

たす役割を描かざるを得ないが、同時に貴族に対して逆風が吹き始め、田舎のお邸のホーム形成が不安定になったことには気がついていた。

#### IV. 家系

次に、家系の問題は、ワイルドよりもハーディの方により深刻に表れている。ワイルドは軽い扱いしかしていない。家系にせよ、出自にせよ、ホームの形成、維持、安定と密接なかかわりがあるので、イングリッシュネスの問題であると言っている。

ハーディからは『テス』を取りあげる。これは家系に翻弄される話である。テスの祖先は、今は没落してしまっただがウィリアム征服王時代にはナイトであったダーバーヴィル家と判明。これが裏目に出て、血族と思った偽ダーバーヴィル家のしゃれ者アレックに誘惑され、私生児を生み、その子を亡くすと農業労働者として各地を転々。トールボセイズ農場で知り合ったエンジェルと結婚するも、アレックとの過去を夫エンジェルは許さず二人は別居。エンジェルはブラジルに行くが、テスは農業労働による自活を強いられる。アレックと再会、彼は貧しいテス一家を金銭的に助ける代わりにテスを情婦とする。エンジェルが戻ってくると、テスはアレックを刺殺する。エンジェルとテスの逃避行はストーンヘンジで終わり、テスは絞首刑になる。家系にはロマンスの響きがあるが、テスの破滅をもたらす。したがって由緒ある家系というものが否定的に捉えられていることが分かる<sup>16</sup>。

ワイルドのほうはどうだろうか。『まじめが肝心』では、同一人物が田舎ではジャック・ワージング、都会ではアーネスト・ワージングになるという喜劇的な状況が設定され、ジャックの出自が問題となる。ジャックはブラックネル卿夫人の娘グウェンドレンと婚約の際、捨て子であったこと、ヴィクトリア駅の手荷物預かり所の手提げかばんの中に入っていたことが判明する。捨て子はトマス・カーデューに拾われ、トマスのポケットにワージング行きの一等切符が入っていたことから、ワージングという姓をもらいうけた。ブラックネル卿夫人は「手荷物預かり所にお嫁に行き、小荷物と縁組する」ことになると婚約に反対。最終的には適当につけたアーネストという名前が、父親の将軍と同じ名前でも本当の洗礼名でもあり、姓は

モンクリーフで、アルジャーノンの兄であることが判明するという流れなので、実に名前が軽いものとして扱われている。これでは由緒ある家名などいい加減なものとし唆しているようなものだ。逆にジャックが後見人をしてきたミス・セシリー・カーデューの出自(III幕)や履歴は詳細である。まず、三つの住居——ロンドン南西区ベルグレイヴ・スクエア149番地、サリー州ドーキング町ジャーヴァス・パーク、およびイギリス北部ファイフ州、スポラン荘——をもつ、故トマス・カーデュー氏の孫娘であった。カーデュー家顧問弁護士は、マークビー・マークビー・マークビー法律事務所、業界では最高の地位にある。出生、洗礼、百日咳、種痘、堅信礼、はしかの証明書についてドイツ語版と英語版の二つが用意されている。財産はコンソル公債で13万ポンド。見事な家柄を持つセシリーと結婚するアルジャーノンの方は、最初は婚姻制度、家族や血縁の否定までしていた人物だが、自分が結婚をするとなると制度容認に豹変する(I幕)。喜劇だから分からないでもないが、家系や出自の扱いがワイルドは恣意的で軽い。三世代以上前の祖先への言及もほとんどない。

家系については、ハーディもワイルドも否定的にとらえているようだ。ハーディは悲劇的、ワイルドは喜劇的に扱っているが、家系に翻弄される点では同じで、二人ともホームというイングリッシュネスを形成しようともがく人間を扱っていると言えるであろう。ここでは都会と田舎の別はあまり問題にならない。

## V. 家系——肖像画の場合

次に家系の問題として、特に肖像画を見てみよう<sup>17</sup>。ハーディの『テス』には、ダーバーヴィル家の肖像画が登場し、ワイルドの『ドリアン』では、ロンドンのドリアン自身の肖像画とカントリーハウスにおける祖先の肖像画が登場する。

ハーディの肖像画は、遺伝、家系の連続、悪を表象する。テスとエンジェルはハネムーン先としてマナーハウスを選ぶ(第34章)。テスの祖先のダーバーヴィル家が住んでいたところだ。ここで目にした約200年前の先祖二人の中年女性の肖像画は、“The long pointed features, narrow eye, and smirk of the one, so suggestive of merciless treachery; the bill-hook nose, large teeth,

and bold eye of the other, suggesting arrogance to the point of ferocity” (214; 下線は筆者)と描かれ、無慈悲、裏切り、傲慢、獯猛さが目をひき、その祖先の特徴はテスの顔にも見て取れ、遺伝、家系の連続、悪の連続を表象し、同じ印象をエンジェルも後に持つ。つまり肖像画とテスの類似は、テスによるアレック殺害の伏線となっている。貴族などの家系は悪との連想が強く、テスのような純粋な女性の家系に翻弄されている様子は、家系が否定的にとらえられていることを示していると言えよう。

ワイルドも『ドリアン』の第11章で、ドリアンがカントリーハウスのギャラリーで祖先の肖像画を見る場面を設定する。

To him man was a being with myriad lives and myriad sensations, a complex multiform creature that bore within itself strange legacies of thought and passion, and whose very flesh was tainted with the monstrous maladies of the dead. He loved to stroll through the gaunt cold picture-gallery of his country house and look at the various portraits of those whose blood flowed in his veins. (137; 下線は筆者)

下線部にあるように、「祖先のやせ細った冷たい肖像画」を見ながら、自分にも先祖の血が流れていることを確認したドリアンは、人間が無数の生、無数の感覚からできた存在で、すべて祖先から譲り受けた不思議な思想と情念の遺産だと感じる。しかもドリアンの肉体は、死者(=祖先)の途方もない病で汚染されているのだ。ゆえにフィリップ・ハーバート他、悪名高い先祖の名前が、その悪行とセットになって語られるのだ。

肖像画の考察についてまとめよう。先祖の肖像画、しかも悪辣な人物らしき肖像画をとりあげて、それがヒーロー、ヒロインらの人生に影響を与えている点に注目しているところまでは、ハーディもワイルドも似ている。したがって祖先を巻き込んだホームの歴史的連続性、伝統というものを二人の作家が田舎のカントリーハウスについて意識していたことは間違いなく、イングリッシュネスの何たるかをよくわかっていたと言えよう。

しかし、ワイルドの場合には、祖先の肖像画だけではなく、画家バジルに描いてもらったドリアン自身の私的肖像画がある。しかも場所はロンド

ンという都会である。このドリアンの肖像画は、彼の魂、道徳的内面を表す肖像画であり、自らは醜く変形しても、ドリアンの美と若さを保つという審美的な目的を持つ肖像画となっている。このドリアンのダブルは、彼が新快楽主義、世紀末の退廃的ダンディズムを実践した結果である。ヘンリー卿が主張する審美的態度は現在の一瞬一瞬において感覚の快楽を得ることが肝要であるから、先祖の肖像画という歴史的伝統とは縁のない、つまりはイングリッシュネスとは無縁の個人肖像画となる。最終的にはそれがドリアン自身の良心の痛みによって破壊されるということは、中産階級的なホームの価値観が強く働き、その力を取り戻したということであろう。

### 〈結論〉

ワイルドの都会のダンディは、最終的には無力化されて家庭人へと回収されるか、ドリアンのように破滅し、ハーディの田舎ダンディもまた破滅する。ダンディはそのままではホームの形成には関われない存在なのである。英国国民意識の一つであるチャリティに対するワイルドの批判は新快楽主義的なアンチ・イングリッシュネスの実践であり、ホームの安定化を阻む言説である。カントリーハウスを、ワイルドはホームの持続する場所として描かざるを得ないが厳しい経済的現実も認識しており、ハーディはけんもほろろの扱いで、廃墟や上流階級が住めない偽のお屋敷が登場した。家系の問題は上流階級の問題であるが、ハーディは庶民を幸福にするものではないという立場のようであり、ワイルドは軽くあしらえばよいものと考えていたようだ。祖先の肖像画には悪辣な人物の血が子孫にも流れ、致命的な運命をもたらすことを示唆しているということで、ハーディもワイルドも肖像画が伝えるホームの連続、特に上流階級のホーム形成には消極的なようだ。ドリアンの私的肖像画は、ドリアンの命を奪うことによって、ドリアンの家系の連続を断ち切り、ホーム形成を許さない。田舎、特にサウス・カントリーをホームのイングリッシュネスとして称揚する都市のリスpekタブルな上流、中流階級に囲まれながら、ワイルドは、伝統的なホーム形成の磁場の強さに対する不快感(アンチ・イングリッシュネス)を、ダンディ、チャリティ、カントリーハウス、家系、肖像画の表象を通じて表現し、同じ表象を使ってハーディは、都会の中産階級読者が好むサウス・

カントリーの田舎においてホーム形成に携わるのは、上流階級ではなく民衆ではないかと問いかけているような気がしてならない。最終的には、二人ともホーム形成をする主体、ネーション(国民)の問題に関わったのではなかろうか。

\*本稿は、日本ワイルド協会第41回大会(2016年12月3日、武庫川女子大学)において行った講演に、加筆修正を加えたものである。

注

- 1 イングリッシュネスについては、Collsの単著、Colls & Doddの共著、Kumar, Giles & Middletonを参照。
- 2 ハーディとイングリッシュネスについては、Kumar(7章)、Brooker & Widdowson, 丹治愛, Whiteheadを参照。
- 3 Lalondeは、『まじめが肝心』が、国教会の儀式の無意味さ、科学の言説の根柢のなさ、法制度の腐敗をとりあげ、社会制度批判になっているとする。つまりアンチ・イングリッシュネスである。Scheibleは、ペイターの『ドリアン・グレイの肖像』の書評を分析したRiquelmeの文章を紹介し、ゴシックのモチーフをイギリスの外の脅威ではなく、内部の脅威を表象するのに利用するアンチ・ブリティッシュネスを見ている(134-35)。Haslamは、『ドリアン・グレイの肖像』第二版におけるアンチ・ブリティッシュネスについて議論している。
- 4 二人について都会と言った場合にはロンドンに限定してよいだろう。また、*OED*によれば、“Englishness”は、“The quality or state of being English or of embodying English characteristics”(*OED*)、“English”は、“Of or belonging to England (or Britain) or its inhabitants”と定義されているので、本稿ではイングランド中心のイングリッシュネスと考えてもさして問題はないだろう。
- 5 南部イングランドにイギリスらしさをみる点については、Alun Howkinsを参照。ハーディが描く都市は地方の町がせいぜいで、ロンドンは多少描かれる程度である。ハーディ自身は、1862-1867年、1878-1881年にロンドン在住。1885-1928年の間は、ドーチェスターの自宅マックス・ゲイトに住みながら、毎年首都ロンドンを訪問、各界の名士と交流した。
- 6 これ以外に、道徳的善悪、健康と病、記憶という観点から二人の作家を見てゆくことも面白いが、紙幅の関係で省略する。特に世紀末イングリッシュネスが、田舎=健康、都会=病という図式で動いているのに対し、ハーディもワイルドも田舎=健康ばかりではなく、田舎=病(死)もあり得るという現実的なとらえ方をしており、田園のイングリッシュネスが脱構築されている点

- は興味深い。
- 7 山田のダンディ論は30年前のものであるが、その10年後に書かれ、影響力のあるケンブリッジ・コンパニオンシリーズに掲載されたCallowayのダンディズム論が、山田があげるダンディの要素をほぼ準拠枠として持つことを考えると、山田の論は今でも色あせていないと言えよう。さらに両者は、世紀末ダンディをリージェンシーのダンディ、フランスのダンディの系譜の上においている点でも共通するが、Callowayは美的感性の重視をその論の中心にすえている。もし両者に足りないところがあるとすれば、それはダンディをゲイ、クィアの中にどう位置づけるかという点であろうか。「ゲイ」/「クィア」批評については金田仁秀を参照。山田は最新のダンディズム論で、犠牲の精神、ノブレス・オブリージュの精神をもダンディズムの中に含めている。
  - 8 ダンディになることを拒否した人物がいる。小説『帰郷』(1878)のクリム・ヨーブライトは、ウェセックスの田舎の下層中産階級出身でありながら、受けた教育を通じてほとんどジェントルマンと言っていい存在だが、都会パリのダイヤモンド店で貴婦人の虚栄に奉仕する仕事に嫌悪感を抱き、ダンディにはならず帰郷、農民教育に専念しホームを築こうとするが、ダンディ好みの妻とは死別。
  - 9 中世、近世のチャリティの流れをおさえながら、18世紀、19世紀のチャリティ全盛時代を包括的に論じた金澤の著書は、最新の研究をふまえた信頼できる好著である。19世紀後半から現代にいたるまでのチャリティの変質を追ったものとしては、岡村を参照。
  - 10 チャリティ(フィランソロピー)と家庭(ホーム)の密接な関係、国家をホームとみる見方については、Prochaskaを参照。
  - 11 ワイルドがマシュー・アーノルドの『文化とアナーキー』の系譜の上にあることについては、鈴木英明論文が簡潔に論じている。
  - 12 『森林地の人びと』第23章のシャートン城の廃墟がその例である。
  - 13 『ギヤスケル論集』(2017年第27号)においてハーディとギヤスケル夫人、フォスターを比較した拙論の中で、ハーディの『微温の人』をこの点から論じておいた。
  - 14 短編「カンターヴィルの幽霊」においては、アメリカのオーティス公使一家が、カンターヴィル卿から幽霊が出没することを承知の上でカントリーハウスを購入する。アメリカの物質主義、消費主義批判が、カントリーハウスや幽霊の商品化に見られる。
  - 15 Peter Mandlerもカントリーハウスの社会史として必読書である。
  - 16 ハーディと家系の問題についてはGilmartinが詳しい。特に、ワーズワースも利用しながら、田舎の墓地の生者と死者の共同体が可能にする家系のナラティブについての議論が面白い。
  - 17 肖像画が、ヴィクトリア朝のゴシック小説やセンセーション小説で多用されたことについては、Mighallを参照。



引用文献

- Brooker, Peter and Peter Widdowson. "A Literature for England." Colls & Dodd. 141-88.
- Calloway, Stephen. "Wilde and the Dandyism of the Senses." *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Ed. Peter Raby. Cambridge: CUP, 1997. 34-54.
- Colls, Robert. *Identity of England*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Colls, Robert and Philip Dodd. *Englishness: Politics and Culture 1880-1920*. 2nd ed. 1986. London: Bloomsbury, 2014.
- "English." Def. A-1 *The Oxford English Dictionary*. 11 August. 2017. <<http://www.oed.com.ezproxy3.lib.le.ac.uk/view/Entry/62251?rskey=iFjeqb&result=1&isAdvanced=false#eid>>.
- "Englishness." Def. *The Oxford English Dictionary*. 11 August. 2017. <<http://www.oed.com.ezproxy3.lib.le.ac.uk/view/Entry/62262?redirectedFrom=englishness#eid>>.
- Giles, Judy and Tim Middleton, eds. *Writing Englishness 1900-1950: An Introductory Sourcebook on National Identity*. London: Routledge, 1995.
- Gilmartin, Sophie. *Ancestry and Narrative in Nineteenth-century British Literature: Blood Relations from Edgeworth to Hardy*. Cambridge: CUP, 1998.
- Girouard, Mark. *Life in the English Country House: A Social and Architectural History*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*. London: Macmillan, 1974.
- . *A Laodicean: A Story of Today*. London: J. M. Dent, 1997.
- . *The Return of the Native*. London: Macmillan, 1974.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. London: Macmillan, 1974.
- Haslam, Richard. "Revisiting the 'Irish Dimension' in Oscar Wilde's *The Picture of Dorian Gray*." *Victorian Literature and Culture*. 42(2014): 267-79.
- Howkins, Alun. "The Discovery of Rural England." Colls & Dodd. 85-111.
- 富士川義之、玉井暲、河内恵子編著、『オスカー・ワイルドの世界』東京：開文社出版、2013年。
- 金澤周作、『チャリティとイギリス近代』。京都：京都大学出版会、2008。
- 金子幸男、「カントリー・ハウスにみるホームの変遷——ギヤスケル夫人、トマス・ハーディ、E. M. フォスターとイングリッシュネス」。『ギヤスケル論集』27 (2017): 1-18。
- 金田仁秀、「ワイルドと『同性愛』の言説——『ゲイ』／『クィア』批評の可能性」『オスカー・ワイルドの世界』424-438。
- Kumar, Krishan. *The Making of English National Identity*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Lalonde, Jeremy. "A 'Revolutionary Outrage': *The Importance of Being Earnest* as Social Criticism." *Modern Drama*. 48.4(2005): 659-76.
- Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. New Haven: Yale UP, 1997.
- Mighall, Robert. Introduction. *The Picture of Dorian Gray*. By Oscar Wilde. ix-xxxiv.

- 岡村東洋光、高田実、金澤周作. 『英国福祉ボランティアズムの起源——資本・コミュニティ・国家』京都：ミネルヴァ書房、2012年.
- Prochaska, F. K. “Philanthropy.” *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950*. Ed. F. M. L. Thompson. Vol. 3. *Social Agencies and Institutions*. Cambridge: CUP, 1990. 357-93.
- Scheible, Ellen. “Imperialism, Aesthetics, and Gothic Confrontation in *The Picture of Dorian Gray*.” *New Hibernia Reviews*. 18.4(2014): 131-150.
- Smith, Anthony D. *National Identity*. Reno, Nevada: Univ. of Nevada Press, 1991.
- 鈴木英明. 「ワイルドと政治」. 『オスカー・ワイルドの世界』439-48.
- 丹治 愛. 「ハーディと田園主義的イングリッシュネス その概念の構築と脱構築」 『ハーディ研究』第42号(2016)1-20.
- 山田 勝. 『ダンディズム——貴族趣味批判と近代文明批判』NHKブックス 東京：日本放送出版協会, 1989.
- . 「ダンディズム」. 『オスカー・ワイルドの世界』166-179.
- Whitehead, James S. “Hardy and Englishness.” *Palgrave Studies in Thomas Hardy Studies*. Ed. Phillip Mallet. London: Palgrave Macmillan, 2004. 203-28.
- Widdowson, Peter. *Hardy in History: A Study in Literary Sociology*. London: Routledge, 1989.
- Wilde, Oscar. “The Canterville Ghost.” *Complete Short Fiction*. Ed. Ian Small. London: Penguin, 2003. 206-34.
- . *The Importance of Being Earnest and Other Plays*. London: Penguin, 1995.
- . *The Picture of Dorian Gray*. London: Penguin, 2003.
- . “The Soul of Man under Socialism.” *The Soul of Man under Socialism and Selected Critical Prose*. By Oscar Wilde. Ed. Linda Dowling. London: Penguin, 2001. 125-160.